分野別研究組織中間報告（2013 年度）

インドネシア華人のアイデンティティ再構築と社会ネットワーク形成

Reconstruction of Identity and Social Network Formation of Chinese Indonesian

中谷　潤子（NAKATANI Junko）

本研究は、これまで行ってきたインドネシア華人の言語使用とアイデンティティ研究に基づき、ここ 10 年の時代の変化の中で若い世代の華人アイデンティティの再構築をライフ・ストーリー・インタビューから明らかにし、さらにインドネシア華人としての社会ネットワークの生成という新しい動きの実態をとらえることを目的とするものである。

華人への同化政策を行ってきたスハルト体制が 1998 年に崩壊してから 10 年を超え、20－30 代の華人の中には、インドネシア華人として自らの存在意義を自問し、社会での位置づけを考えている人たちが現れている。華人言語文化が解禁されたインドネシアにおける華人の立場や地位の変化という社会的文脈において、次代を担う世代の意識変容を掴み、彼らのアイデンティティやエスニシティについて再検討を行いたいと考えた。

まず、1年目である 2013 年にはインドネシアジャワ島にあるインドネシア第 2 の都市スラバヤにて若手華人へのインタビュー調査を行った。調査地をスラバヤにしたのは、前年度に科研調査で訪れたことの流れからと、それまで主に首都ジャカルタで調査を行ってきたので、今後のジャカルタやそれ以外の地方での調査を視野に入れつつも、地方都市の動向を知ることを優先させたかったからである。スラバヤでは、10 代後半の大学生から主にスハルト時代が学齢期であった 40 代にインタビューできた。そこで得られた結果は、華人アイデンティティが強いかインドネシアンアイデンティティが強いかは、世代ではなく家庭環境が大きく影響しているのではないかということであった。インドネシア社会において華人の地位の向上を多少意識するとはいえ、華人自身の意識も華人以外から見た華人への視線も、スハルト時代と大きく変わっていないともいえる。また、社会ネットワークについては期待したほど大きな潮流といえるほどのものはなく、逆に言えば華人同士で固まろうというような意識はもはやなく、インドネシア人のひとりとして生きていることを示すものともいえる。そしてこれは、先行研究でたびたび指摘される華人は一枚岩ではないということとも一致する。

2 年目である 2014 年には首都ジャカルタで同様に 20－40 代を中心にインタビュー調査を行った。これは、スラバヤでの調査結果と比較することのほかに、大都市での流れを知ることと社会ネットワークの傾向を知るためであった。インタビュー結果の分析はまだだが、やはり世代よりも家庭差が大きいと思われる。また、首都であるジャカルタは様々な民族が混在して生活を送るメトロポリタンであることの影響も大きい。

2　地域での調査を終え、今後、焦点としたいのは地域差だ。しかも大都市ばかりではなく、地方都市、ジャワ島以外の島の華人に向けてのインタビュー調査を、来年度には行いたいと考えている。